

## ゼミナールでの取り組みについて

社会マネジメント学科 中 西 泰 子

ゼミナールで重視していることは、学生たちが、自分たちが抱えている思いや日常的経験の社会的重要性を認識できるように働きかけることである。そのことを念頭におきながら、限られた人数での、ときに雑談に思えるような自由なディスカッションを繰り返し、各自で決めたテーマに沿ってインタビュー調査を実施・分析する。そして、それらをもとにして卒業論文を2年かけて完成させていく。

女性の声、なかでも若い女性の声は、なかなか社会に取り上げられることが少なく、とりあげられる場合も、彼女たち自身の声がとりあげられるというよりも、より社会的に力をもった人たちからみた姿が紹介される、といった形をとることが少なくない。そうしたこともあってか、女子学生たち自身が、自分の思っていることを感じていること経験していることに、大した意味はない、社会的な事柄として話すほどの価値はないと感じていることが多い。彼女たちとの雑談のようなディスカッションの中に、どれだけ多くの社会的課題や変革の可能性があるか、それを自分たち自身でみつけて深めていってもらえるようサポートすることがゼミナールの教員としての役割だと考えている。

ゼミで研究テーマを選ぶにあたっては、家族やジェンダーに少しでもかかわることであれば、何を選んでもよいと伝えている。個人的な見解かもしれないが、家族にもジェンダーにもまったくかかわることのない社会的な事柄があるとはなかなか考えにくい。つまりは、社会的テーマであればほぼなんでもいいですよといっているに等しい。

しかし、テーマ決定の自由度が高いと、学生にとっては「決めなければいけない」というプレッシャーが高まるようである。もちろん元々探求したいことがあってゼミに入る場合もあるが、自分の興味関心に自覚的ではないことも少なくない。

そうしたことを想定して、3年生の春学期は自分が関心を持てそうな様々な事柄に可能なかぎりふれて、それらについてゼミの学生同士で意見を交換する期間としている。具体的には、毎回の授業において新聞記事や雑誌記事、ネット記事などから、自分が興味をもったものを複数持ち寄ってもらう。ゼミでは各自が選んだ記事の概要を紹介したうえで、自身がそれを選んだ理由についても考えてコメントする。自分が選んだ記事、そして周りのゼミ生が選んだ記事を毎週目にすることで様々な社会的事柄に触れることができる。また、選んだ理由を考えることで自分と社会的事柄のつながりを意識することもできる。さらにゼミ生同士の意見交換で、同じ事柄についても人によって異なる見解があることを知ることができる。

この期間をとおして、自分の日常的な経験、個人的な好みなどが地域や世界とつながっていることや、自分の思っていることを声に出して誰かに伝えて共感してもらえることの気持ちよさを実感してもらえるように意識してサポートを行っている。それが少しでもできれば、先行研究の探索やインタビュー調査、論文作成、ひいてはその後の人生を自分のために積極的に楽しんでいくための大事な基盤になると信じている。